棄轎

田中貢太郎

上州（じょうしゅう）の田舎（いなか）の話である。某日（あるひ）の夕方、一人の農夫が畑から帰っていた。それは柄（え）の長い鍬（くわ）を肩にして、雁首（がんくび）を蛇腹（じゃばら）のように叩き潰（つぶ）した煙管（きせる）をくわえていた。そして、のろのろと牛のように歩いていると、路傍（みちばた）の松の木の下に異様な物を見つけた。

「ほう」

それは見る眼にも眩（まぶ）しい金と銀の金具をちりばめた轎（かご）であった。

「諸侯（だいみょう）の乗るような轎じゃねえか」

それにしても、轎夫（かごかき）もいなければ伴（とも）の者もいない。まるで投げ棄（す）ててでもあるように置いてあるのが不思

議でならなかった。轎の中はひっそりとしていて、何人（たれ）も乗っていそうにないし、見ている漢（もの）もないので、轎の傍へ寄って往って垂（た）れをあげた。垂れをあげて農夫は驚いた。轎の中にはお姫さまのような姝（きれい）な女がいた。

「これは、どうも」

農夫はあわてて垂れをおろそうとしところで［＃「おろそうとしところで」はママ］、女がちらとこっちを見た。

同時に農夫はのけぞった。

「わ」

それは眼も鼻も口もないのっぺらぽうの顔であった。

農夫は転げるように逃げ帰ったが、それから病気になって死んでしまった。
その農夫が怪しい轎を見た日のこと、それから数分と経たない時刻に、その村からよっぽど離れた村の農夫が、これも畑から帰っていると、路傍に金と銀の金具のある轎があった。不思議に思って垂れをあげて見ると、中にお姫さまのような女がいた。そして、驚いて垂れを下ろそうとしたところで、女が顔をあげたが、それもやっぱりのっぺらぽうであった。で、その農夫も仰天して逃げ帰ったが、これも病気になって死んでしまった。

底本：「伝奇ノ匣6　田中貢太郎日本怪談事典」学研M文庫、学習研究社
　　２００３（平成15）年10月22日初版発行
底本の親本：「日本怪談全集」改造社
　　１９３４（昭和９）年
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
２０１０年10月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。